

## バートルビーと語り手の共感

藤 本 幸 伸

### Bartleby and the Sympathy of the Narrator

Yukinobu Fujimoto

『バートルビー』(“Bartleby, the Scrivener: a Story of Wall Street (1853)”)を、バートルビーに同情を寄せながらも最終的に見捨ててしまう利己的で自己欺瞞的な人物と従来の批評でさんざんな評判の語り手に焦点を当てて読んでみたい。この物語の冒頭で語り手は、自分のことを知ってもらうのがバートルビー理解の一助となるとして、以下のように自己を語る。

Imprimis: I am a man who, from his youth upwards, has been filled with a profound conviction that **the easiest way of life is the best**. Hence, thought I belong to a profession proverbially energetic and nervous, even to turbulence, at times, yet nothing of that sort have I ever suffered to invade **my peace**. I am one of those unambitious lawyers who never addresses a jury, or in any way draws down public applause; but, in **the cool tranquility of a snug retreat, do a snug business among rich men's bonds, and mortgages, and title-deeds**. All who know me, consider me **an eminently safe man**. The late John Jacob Astor, a personage little given to poetic enthusiasm, had no hesitation in pronouncing my first grand point to be **prudence**; my next, method (4 : 強調は引用者)

ここで語り手は、「平穏な生活が一番だ」(the easiest way of life is the best)という自分の信条と何よりも「平和と平穏さ」(peace, cool tranquility)を大切にすること、自分とジョン・ジェイコブ・アスター (John Jacob Astor) との関わり、アスターからのprudence<sup>1)</sup>という評価、更に次の段落で、バートルビーを雇い入れる少し前に衡平法裁判所主事 (a Master in Chancery) の役職を得たことを述べ、自分と事務所の位置そして他の事務員を紹介した後、自らの「驚いた目」(astonished eyes) で見たバートルビーを自分の感情とともに語っていく。

以下、語り手とアスターとの関係、prudenceという語の持つ意味、「共感 (sympathy)」の物語作法、最後に語り手のマージナルな存在という点からこの物語を読んでみたい。

#### 1. ジョン・ジェイコブ・アスターと語り手

19世紀アメリカで最も裕福なアスターとの関わりは、冒頭の箇所だけにとどまらない。バートルビーから逃げるようにしてウォール街の事務所から引っ越した語り手が、前の事務所の家主と新しい借り手に詰め寄られて、バートルビーと会い退去を促そうとするが失敗、ニッパーズ (Nippers) に仕事をすべて任せ逃げるようにして旅に出る。

For a few days, I drove about the upper part of the town and through the suburbs, in my

rockaway; crossed over to Jersey City and Hoboken, and paid furtive visits to Manhattanville and Astoria. In fact, I almost lived in my rockaway for the time. (41-42: 強調は引用者)

この逃避先すべてがアスターと関わりを持つ。ウォルター・エイトナー (Walter H. Eitner) も言うように、パットナム紙の読者はこれらの地名から直ちにアスターを連想したろうし、語り手も意図的にこれらの地域に出向いていったはずである (15)。更に、語り手が日曜の朝行くはずだったトリニティ教会もアスターを連想させる。この物語の多くの地名がアスターを喚起させるが、そのアスターと土地とはどのように関係していたのだろうか。

19世紀初めからニューヨーク市は急激に人口がふくらみ始め、それに伴い住宅不足が発生、1833年をはじめ集合住宅 (tenement) が建設され、南北戦争前までには1万8000の集合住宅に50万人が居住していた。慢性的住宅不足と住宅密集という状況の中、伝染病と火事が多発し、住居と安全を求めて富裕なものはマンハッタン北へと移住し始めた。このような土地事情を背景に、アスターは土地に多額の資金をつぎ込み始める。1810年、8年前に購入したウォール街の土地を8000ドルで売却したとき、お得な買い物にほくそ笑む買い手に、アスターは「この8000ドルで購入したカナル通りの北の80区画分は、君の土地が1万2000ドルになる頃には、8万ドルになっているだろう」と答えた。そして、1822年の黄熱病 (Yellow Fever) でロウアーマンハッタンの人々の北への移住が加速し、カナル通りの北側には20万にもの市民が居住する煉瓦造りの建物が建ち並び始め、アスターの土地価格は必然的に上昇することになった。また、1802年、アーロン・バー (Aaron Burr) からトリニティ教会の241区画分の借地権を62,000ドルで買い取ると、1区画55年間の賃貸料500ドルで又貸し、その差額で利益を得た。このようにアスターは、後に高騰するであろうと思われる土地或いは借地権を安く手に入れ、その土地を又貸し、その差額で莫大な富を得ていた。1840年から1848年の賃貸からの収入は126万5000ドルを超えていたという (Madsen, 56, 58, 245; Spann, 228-230)。

このように、アスターと彼に関連する地名は土地投機という市場経済そのものを喚起する。この土地投機に関連する保証書・抵当書・権利書の写しが語り手の仕事であり、それ故、語り手への批評家の評判は芳しくない。しかし、語り手は、アスターとの関わりが自分に不利になることに無自覚であっただろうか。アスターの友人でもあるフィリップ・ホーン (Philip Hone) が日記に「アスターはもう十分に生きた」と書き記しているように、生前からアスターに対する評判は大方否定的であったし、新聞雑誌等の死亡記事もほとんどが反感を込めた文章であった。とすると、世間のアスターへの反感を語り手も十分意識していたはずである。むしろ、自分に不利になるアスターとの関わりを冒頭で書き記す行為に語り手の作為すら感じられる。では、なぜ語り手はこのような作為を計ったのか、これをprudenceの語法との関係で考えてみたい。

## 2. Prudenceの語法

まず、テキストの中で語り手自身が用いるprudenceを見ておきたい。最初は、日曜の朝、トリニティ教会に行く途中に事務所によると、バートルビーが事務所に住み着いていることを発見した時 (24)。次は、事務所の皆がpreferという語をやたらと使い始めバートルビーを解雇しようと考えたのを思いとどまったとき (28)。最後に、バートルビーに解雇通告をした次の朝、バートルビーが立ち去っていないことに怒りを露わにする場面、それが以下の文章である。

I was now in such a state of nervous resentment that **I thought it but prudent to check myself at present from further demonstrations.** (この後、AdamとColtの事件を思い起こす) But when this old Adam of resentment rose in me and tempted me concerning Bartleby, I grappled him and threw him. How? Why, simply by recalling the divine injunction: ‘A new commandment give I unto you, that ye love one another.’ Yes, this it was that saved me. Aside from higher considerations, **charity often operates as a vastly wise and prudent principle** — a great safeguard to its possessor.... but no man, that ever I heard of, ever committed a diabolical murder for sweet charity's sake. **Mere self-interest, then, if no better motive can be enlisted, should, especially with high-tempered men, prompt all beings to charity and philanthropy.** (33-34: 強調は引用者)

ここで語り手は、prudenceを自らの行為規範とし、これに従えば他者への慈愛心が生まれ、アダムーコルト (Adam-Colt) 事件のような犯罪に至らないで済む。そして、この他者への慈愛心を生じさせる要因がself-interestだという。自己利害を意味するself-interestが、なぜ他者との社会生活において他者に危害を加えることを防止する道德の働きをすると語り手は言うのだろうか。

そもそもinterest, self-interestという概念は、アルバート・ハーシュマン (Albert O. Hirschman) によると、国家を形成管理するために、その構成員である個人の行動を律するものは何かを問う文脈で表れてきたという。中世以来、金銭欲・性欲を抑えると考えられてきた名誉栄光への情念が貴族の衰退と共に廃れ、それに代わって、従来貶められてきた富への情念が人間の変化しない性質として称揚されてきた。この性質を言い表す言葉としてinterestという概念が登場し、このinterestは個人の欲求を満たす際の合理性を意味していた。このような概念布置の変化に伴い商業活動は“gentle, polite”と形容され、interestは“Interest will not lie”という諺に見られるように美德 (virtue) としての資格を獲得するにいたった。つまり、個人が自らのinterestを合理的に追求して行けば、自ずと社会全体の利益になると考えられていたのである。このようなinterest概念のアメリカ的受容の一端をベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) の『自伝』で確認しておきたい。

『自伝』第2部は、友人ベンジャミン・ヴォーン (Benjamin Vaughan) が“rules of prudence in ordinary affairs” (1375) と評価する (トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) もprudential rules for our government in societyと賞賛する)、結局印刷されなかったパンフレット『美德の技法』(The Art of Virtue) の大部分が盛り込まれている。道德的完成 (“moral Perfection” (1383)) を目指すため13の徳目を書き込んだ手帳にフランクリンが差し挟んだ言葉の「自分の本当のinterestを見つける知恵」(1388) とか、また、「幸福になろうとするものなら誰にとっても美德を持つことがinterestである」(1392) であるとか、更に、「個人と国家のinterestは一致する」(1395) というようにinterestが使われる。このようなフランクリンの表現は、1765年の新聞ニュー・ヨーク・ガゼット紙の文章と比べると、その意味が一層明らかにしてくる。

**Self-interest is the grand Principle of all Human Actions:** it is unreasonable and vain to expect Service from a Man who must act contrary to his own interests to perform it. No Government therefore can be wise and good, unless **the Interests of Individuals is made co-incident with the Interest of the Publik.... And the publik Happiness is**

**then in the most perfect State, when each Individual acts the most agreeably to his own Interest.** This ought to be the Model of all Human Government. (quoted in Friedman, 789-790: 強調は引用者)

この新聞は、自己利害が人間の行為規範であり、これに反する行為は非合理的。個人が自己利害に沿って行為するとき、公共の幸福はもっとも完全となる、という。このようにフランクリンと同時代の新聞から、自己の利害に忠実であるとき、公共の幸福も最大となるような行為のあり方を示す言葉がinterestであった。とすると、語り手がバートルビーに対して怒りを抑え、self-interestに従ってバートルビーに慈愛をかけると言うとき、自分を含めバートルビーの幸福をも最大にしようと願ったのであり、語り手が利己的だとは言えなくなるだろう。

またフランクリンは、13の徳目の中でも特に、勤勉 (industry) と儉約 (frugality), 誠実 (sincerity) と嘘を付かないこと (truth) という組み合わせを好んで使う。勤勉儉約であるように見せかけることで、社会の信用 (credit) が得られ富を手にでき、誠実で嘘を付かないことで、社会の信用を得て幸福 (felicity) に至るという。この「見せかけ→評判→信用→富→幸福」というフランクリンの側面が語り手にもある。ターキー (Turkey) やニッパーズが紳士然に (gentlemanly) 見えるから有用 (useful), バートルビーも嘘を付かない (honest) から有用と言う語り手が、最終的にバートルビーを見切ろうと決心したのが、著しく自分の評判が悪くなると判断したときであったことを考え合わせると、語り手はフランクリンと同じく信用を何よりも重視すると言える。この信用は、政治思想史家ジョン・ポーcock (John Pocock) によると、将来のある時期に支払われるという約束と期待に基づいて、現在の行為を決定する新しい個人のあり方を表し、市場経済社会の一つの特徴がこの信用の将来という時間性に象徴されるという (97-102)。

このinterestや信用という概念から見ると、語り手が世間のアスター批判を知りつつもアスターとの連想を明け透けに語るその作為性は、アスターに象徴されるアメリカの市場経済社会そのものを必然として受け入れることを意味していよう。しかし、語り手は、アスターのような自己利益のみを追求する立場とは距離を置く姿勢も示す。それが語り手のprudenceである。

フランクリン、ジェファソンと友人であったケームズ卿 (Lord Kames) が後援者であったグラスゴー大学の道徳哲学講座、この講座で道徳哲学を担当したのがアダム・スミス (Adam Smith) であった。スミスは自らの道徳思想をまとめた『道徳感情論』で、prudenceを「賢明かつ思慮分別のある言動」(Wise and judicious conduct (TMS, VI. I. 15)) と定義し、このprudenceを備えた人物は、「野心を成就して空しい栄光を得ることよりも、真に高邁なことをやり遂げ名誉を授かることよりも、支障なく安穩無事に暮らすことを優先させる」(TMS, VI. I. 12) と言いい、正義 (justice) や慈愛 (benevolence) に優先する美德としてprudenceを以下のように語る。

**Concern for our own happiness recommends to us the virtue of prudence:** concern for that of other people, the virtues of justice and benevolence; of which, the one restrains us from hurting, the other prompts us to promote that happiness.... [T]he first of those three virtues is originally recommended to us by our selfish, the other two by our benevolent affections. Regard to the sentiments of other people, however, comes afterwards both to enforce and to direct the practice of all those virtues. (TMS, VI. concl.

1：強調は引用者)

自己の幸福を優先し、外部からの障害を極力排し平穩を求めるというprudenceは、正義や慈愛に比して、他者との社会生活上第一の美德なのである。interestや信用という語から、語り手は市場経済社会の中での新しい合理的な人間のあり方を肯定しつつ、アスターの利己的利益追求とは一線を画する。その姿勢が冒頭で自慢げに言及する語り手のprudenceという美德と言えるだろう。そして、このprudenceを道徳規範とする語り手は、バートルビーの不可解な言動によって自己の利害が損なわれるぎりぎりの所まで、バートルビーに配慮するさまを語っていく。そのバートルビーに対して示す配慮が「共感」である。

### 3. 「共感」の物語作法

19世紀アメリカの文学に「感傷小説」と名付けられる一連の小説が存在し、その小説に使われるsentiment, sensibility, sympathy<sup>2)</sup> という一連の語彙は、シャーリー・サムエルズ (Shirley Samuels) がいうように、「読者・観衆にある種の感情的反応を引き起こす一連の文化慣習」(4)の役割を担っていた。「感傷小説」は、家族的親密な感情をモデルとし自己のうちに他者の感情を想像してバラバラな自己と他者とを結び合わせていく物語である。この感情が「共感」であり、エリザベス・バーンズ (Elizabeth Barnes) は、この「共感」を基礎とする「感傷小説」の特質を「共感による感情移入」(sympathetic identification)という言葉で言い表す。しかも、このような「共感」は、「感傷小説」の主人公および読者が主に女性であることから、「女性化された」感情でもあった(1-18)。

以上のような「感傷小説」の文脈を背景にこの物語を見てみると、冒頭で語り手が、「その気になれば、善良な紳士に笑みを漏らさせ、感傷的な読者なら泣いてしまうような物語を語ることができる」(3)と言い切るのは、語り手が「感傷小説」の物語作法に通じていることの証左と言える。

更に、19世紀半ばニューヨーク市では、「感傷小説」の他にもう一つの物語作法、都市で日々発生する新奇な事態を読者に変わって解釈してみせる物語作法が存在し、これをハンス・バーグマン (Hans Bergmann) は「ニューヨーク言説」(New York discourse) 或いは「出会いの物語」(encounter narrative) と名付けた(10-11)。田舎から若者が、海外から移民が押し寄せてくる都市では、日々新奇な出来事が発生し、この日常化した新奇な出来事が情報としての価値を持っていた。新聞は読者に変わってこの情報としての日常を、ときには怒りを露わにし、ときには泣いて見せ、ときには困惑を装いながら、解釈してみせる。フィリップ・ホーンと並ぶ日記作家ジョージ・ストロング (George Strong) は、1850年の日記の中に「他者と共感し共通の人間らしさ (common humanity) を確認するのに感情が必要だ」と書き記しているように、19世紀半ばのアメリカでは、自己と他者を結び合わせる「共感」という感情が大きな位置を占めていた。この「共感」という感情を基本としたものがたりが「感傷小説」とニューヨーク言説であった。しかし、この二つの物語作法は共通して、自己の感情を基にして他者の感情を推し量り、最終的には自己と他者の境界が曖昧になってしまう危険性も孕んでいた。

この二つの物語作法に通じた語り手が、風変わりな言動をするバートルビーのことを「共感」を交えつつ語っていく。この語り手の「共感」は、二つの方向に向けられる。一つは、語り手がバートルビーに向ける「共感」、もう一つは、読者に向けて一般論を述べたり、直接訴えかけたりして、語り手自身に向けてもらう「共感」である。

ターキーに対して「同胞あるいは仲間の感覚」(my fellow-feeling) (7) を覚える語り手は、バートルビーの不可解な行動を、「判断力で解決できないことを慈愛心とともに何とか想像力を使って解釈しようとする」(17)。そして、「始めて、疼くような憂鬱に囚われ、人間としての絆、同胞としての憂鬱を感じ」(23) で語り手は、バートルビーに対し「共感」を寄せる。

このように語り手は、ターキーやバートルビーへの自らの「同胞意識」や「良心」を語り、また、直接自分の心情を明かして見せたりして、読者の自分への「共感」を勝ち取ろうとする。しかし、結局バートルビーを見捨てるような形で死なせてしまうことで、読者の「共感」は得られず、かえって、自己欺瞞という評価を受けてしまう。しかし、この物語の中で、ターキーやバートルビーらは語り手からの「共感」を感謝しようには見えない。そもそも、語り手は冒頭で、他の書記についての「感傷的な読者なら泣いてしまうような物語」ではなく風変わりなバートルビーについて語ろうと公言したとき、このような感傷物語でバートルビーを解釈しうる可能性の低さを仄めかしていたのではないか。語り手は、最初から、自分の物語が読者の共感を得られないということを予想していたのではないか。語り手はアスターとの連想が自分に不利になると知りつつもアスターに言及して見せたように、ここでも自分に「共感」が寄せられないと知りつつもバートルビーの物語を語るのはなぜだろうか。その秘密を語り手のマージナルな存在に求めていきたい。

#### 4. 語り手のマージナル性

まず、語り手はアメリカ社会の自由主義市場経済化が必然である時代状況野中にあった。元々「国王の良心」(conscience of the king) を担う制度として始まった衡平法裁判所主事制度が1846年に廃止決定となった事実は、この制度の本来の機能を検討した上で、改めて自由主義社会ではこの制度が必要でないとの判断を象徴すると言える。思想史家のダニエル・ウォーカー・ハウ (Daniel Walker Howe) によると、prudenceとinterestが自由主義を、良心 (conscience) と慈愛が共和主義をそれぞれ象徴する (10-15)。とすると、語り手は、時代の必然である自由主義社会から葬り去られていく共和主義とのつながりを持つマージナルな人物ということになるだろう。また、従来古典的教養を持つことが必須であった法律家が、法学の専門化に伴い判例解釈を得意とする法律家に取って代われようとしている時代に、文学に通じる語り手は法律家としてもマージナルな存在であると言える。更に、19世紀アメリカの主流文学である「感傷小説」の物語作法をもともと拒否する語り手は、物語作家としてもマージナルであろう。いずれにせよ、自由主義社会の中で、語り手がマージナルな存在であることに変わりはないであろう。では、語り手のマージナル性は何を意味するのか、もう一度語り手の自己語りの文章を検討して見たい。

ここで語り手の「平穏な生活が一番だ」という信条のなかの“easy”は、Webster3によると、「平穏な」(tranquil) とあり、「極めて“safe”な人間」の“safe”は、別の辞書では“prudent”とある。すると、この文章全体が、prudenceを持つ語り手の「平和と平穏」という幸福感を言い表していると言えるだろう。この語り手の幸福感と奇妙な類似を示す人物が、「青ざめた、死の様相をした、青白い、幽霊のような」(pale, cadaverous, pallid, ghost) と死を連想させる言葉と共に「動かない、静かな、落ち着いた、平穏な」(sedate, calm, composed, tranquil) と形容されるバートルビーである。このような類似性を認めるが故に、語り手は、バートルビーを見捨てるようにして事務所を去るとき、バートルビーから身を剥がすような感覚を覚えるのである (strange to say — I tore myself from him whom I had

so longed to be rid of. (38)). この同じ幸福感を持つ二人は、一人が生き残りもう一人は死へと赴くという〈生と死〉の対比で異なる。

メルヴィル作品には、トンモ (Tommo), レッドバーン (Redburn), ホワイト・ジャケット (White Jacket), イシュマエル (Ishmael), デラノ (Delano) という相対的生き方に甘んじるものたちが生き残り、タジ (Taji), エイハブ (Ahab), ピエール (Pierre) という絶対を求めるものが破滅的死を遂げるという〈生と死〉の対比を示す人物が描かれる。メルヴィル最後の作品『ビリー・バッド』(Billy Budd) においても同じ対比的人物が登場する。船長として“prudence and rigor” (353) を要求されるヴェア (Vere) は、ビリーを処罰しない場合の反乱の危険性を恐れ、ビリーの処刑を決断する。その決断を船上の臨時法廷で他の士官に通告するとき、この事件の「本質的善悪」(the essential right and wrong (354)) は明らかだとはいえ、この件を“on that primitive basis” (354) つまり自然に基づいて決定する権限は自分ではなく、海軍法 (the martial law) に基づいて決断をせざるを得なかったと説明する。ビリーへの「私的良心」(the private conscience (362)) を告白しつつ、しかし、この良心を“the heart” つまり「人の中の女性的なるもの」(the feminine in man (362)) なものとして退け、あえて法の遵守を選び取り、ビリーの死を余儀ないものと見なす。船上での反乱を回避し法の秩序を保つためにビリーの処刑を決断したとき、ヴェアは、女性化された感情である良心を押さえ込みprudenceとrigorを選び取ったと言える。自然的感情に基づく善悪の判断ではなく人為による法秩序を重んじるヴェアは、たしかに地上的相対の生き方に甘んじるとは言え、純粋無垢のビリーの死を代償として、船の上という一つの社会で反乱 (mutiny) というより大きな悪を回避したことになる。

このように〈生と死〉という対比から、改めてバートルビーの物語を見ると、語り手のマージナル性が意味するものが浮かび上がってくる。この物語の中には、1840年代ニューヨーク市を賑わせたアダム・コルト事件、犯罪の温床であるファイブ・ポイント (Five Points) を封じ込めるために建設された刑務所 (The Tombs)、そこに収監されていた信用詐欺師のモンロー・エドワーズ (Monroe Edwards)、一度発生すると収拾のつかない暴動 (mob) などの犯罪が隠微な形で語られる。このような悪が必然的に伴う自由主義社会で、犯罪に巻き込まれることも、他者を傷つけることもなく平穏に暮らすため語り手が選び取ったのが、相対的な生き方であるprudenceという道徳規範であった。ピエールは絶対を求めて、結局、「真理の道化、美德の道化、運命の道化」(the fool of Truth, the fool of Virtue, the fool of Fate) (Book 26) として周りのものをも巻き込みながら破滅的死という不幸に至る。この原因が、イザベルとの自他の境界を取り払って一体となろうとする「共感」にあったとすると、語り手がバートルビーを見捨てるという代償を払う形で、「共感」の物語作法を捨てるとき、語り手は自他の境界を曖昧にし破滅へと至らしめる「共感」を否定したのではないだろうか。マージナルな存在の語り手が自己戯画的に語るこの物語には、自由主義社会で「共感」に抗する個人として生きるための道徳・幸福が密かに語られていると言えるのではないだろうか。

#### 注

- 1 本文中prudenceやinterest, self-interestなどはあえて原語のままにしてある。これまでの代表的な翻訳、例えば坂下訳では「慎しみ、自己利害の心」、杉浦訳では「慎重さ、純粋な自己利益」とそれぞれ辞書の領域をでない訳語で処理されていることから、これらの語はあまり注目を受けなかったようだ。本来なら、著者の解釈を訳語でもって提示すべきところではあるが、様々な場面でも使える汎用性のある訳語を見だし得ていないので、原語のままでの提示に留まってしまった。因みに、アダム・スミスの『道徳感情論』では、それぞれ「慎慮」「利己心」と訳されている。

- 2 sentiment, sensibility, sympathyという語は、「感情、感受性、共感」など訳し分けられることが多いが、本文の文脈では必ずしも訳し分ける必要性はなかったため、これも原語のままにしてある。いずれにしても、「共感による感情移入」が物語作法のうえで重要な働きをしていたことの指摘が大切である。

#### References

- Adler, Irving. "Equity, Law and Bartleby." *Science & Society*, 51 (Winter, 1987-88): 468-474.
- Appleby, Joyce. *Liberalism and Republicanism in the Historical Imagination*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1992.
- Barnes, Elizabeth. *States of Sympathy: Seduction and Democracy in the American Novel*. New York: Columbia University Press, 1997.
- Bergmann, Hans. *God in the Street: New York writing from the Penny Press to Melville*. Philadelphia: Temple University Press, 1995.
- Bergmann, Hans. "'Turkey on his Back': 'Bartleby' and New York Words." *Melville Society Extract*, 90 (Sept, 1992): 16-19.
- Eitner, Walter H. "The Lawyer's Rockaway Trips in 'Bartleby, the Scrivener'." *Melville Society Extract*, 78 (Sept, 1989): 14-16.
- Foley, Barbara. "From Wall Street to Astor Place: Historicizing Melville's 'Bartleby'." *American Literature*, 72 (March, 2000): 87-111.
- Franklin, Benjamin. *Writings*. New York: The Library of America, 1987.
- Friedman, Bernard. "The Shaping of the Radical Consciousness in Provincial New York." *Journal of American History*, 56 (1970): 781-801.
- Giddings, T. H. "Melville, The Colt-Adams Murder, and 'Bartleby'." *Studies in American Fiction*, 2 (1974): 123-132.
- Griswold, Charles L., Jr. *Adam Smith and the Virtues of Enlightenment*. Cambridge University Press, 1999.
- Hirschman, Albert O. *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*. New Jersey: Princeton University Press, 1997.
- Hirschman, Albert O. "The Concept of Interest: from Euphemism to Tautology." In *Rival Views of Market Society and Other Recent Essays*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1992.
- Howe, Daniel Walker. *Making the American Self: Jonathan Edwards to Abraham Lincoln*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1997.
- Jefferson, Thomas. *The Portable Jefferson*. Ed. by Merrill D. Peterson. New York: Viking Penguin, 1975.
- Kuebrich, David. "Melville's Doctrine of Assumptions: The Hidden Ideology of Capitalist Production in 'Bartleby'." *New England Quarterly*, 69 (Sept, 1996): 381-405.
- Lankevich, George J. *American Metropolis: A History of New York City*. New York: New York University Press, 1998.
- Lopate, Philip, ed. *Writing New York: A Literary Anthology*. New York: The Library of America, 1998.
- Madsen, Axel. *John Jacob Astor: America's First Multimillionaire*. New York: John Wiley & Sons, Inc., 2001.
- McCall, Dan. *The Silence of Bartleby*. Ithaca: Cornell University Press, 1989.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor and Other Stories*. Ed. by Frederick Busch. New York: Viking Penguin, 1986.
- Pocock, J. G. A. *Virtue, Commerce, and History*. Cambridge University Press, 1985.
- Samuels, Shirley, ed. *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in 19th Century America*. New York: Oxford University Press, 1992.
- Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiments*. Ed. D. D. Raphael and A. L. Macfie. Indianapolis: Liberty Fund, 1984.
- Smith, Herbert F. "Melville's Master in Chancery and His Recalcitrant Clerk." *American Quarterly*, 17 (1965): 734-741.
- Spann, Edward K. *The New Metropolis: New York City, 1840-1857*. New York: Columbia University Press, 1981.
- Swann, Charles. "Dating the Action of 'Bartleby'." *Notes and Queries*, Sept (1985): 357-8.
- Wilson, James C. "The Significance of Petra in 'Bartleby'." *Melville Society Extract*, 57 (Feb, 1984): 10-



12.

Wood, Gordon S. *The Radicalism of the American Revolution*. New York: Vintage Books, 1993.

柄谷行人 「自由・平等・友愛」『＜戦前＞の思考』 東京：講談社学術文庫，2001.

藤江啓子 「緑の休息―「書記バートルビー」研究―」 愛媛大学法文学部論集 人文学科編 第10号  
2001.

ハーマン・メルヴィル 『乙女たちの地獄 メルヴィル中短編集Ⅰ』 杉浦銀策訳 国書刊行会 1983年

ハーマン・メルヴィル 『幽霊船』 坂下昇訳 岩波文庫 1979年

—平成20年10月31日 受理—